

メンタルフレンドの活動内容とその効果に関する考察 — 児童相談所への実態調査と事例研究 —

栗田 明子

帝京短期大学生生活科学科

The Consideration about contents and effects of Mental friends' activity
- A Investigation the actual situation for Child consultation center and A Case study of Mental friend-

Akiko KURITA

Department of Living Science, Teikyo Junior College

キーワード：メンタルフレンド、不登校、ひきこもり、児童相談所

1. はじめに

1991年に開始されたメンタルフレンド活動は、事業開始から20年が経過したが、不登校やひきこもりの問題は遷延化しまた複雑化している。筆者は、研究活動を行う傍ら、民間の支援機関の臨床家と定期的な情報交換をしているが、「以前のような『典型的な』不登校の事例はほとんどない」などの発言が聞かれる。こうした状況において、メンタルフレンドの役割とその効果がどのように変化したか、具体的にどのような活動が行われ、どのような行動面の変化があるのかを、実態調査と事例をもとに考察したい。

2. メンタルフレンド活動とは

1) メンタルフレンドの歴史

不登校児童への支援は、かつて「家庭教師的治療者」や「治療的家庭教師」として家庭訪問という形態で始められた（近藤ら、1981；緒方ら、1994）。この治療的家庭教師を、近藤（1981）は「彼と外界の橋渡しになるような、あるいは治療者と現実外界の人間のちょうど中間にあるような『友達』または『お兄（姉）さん』的な役割の人」としており、まさにメンタルフレンドの性格を持った存在であったと考えられる。

このメンタルフレンドは、不登校の子どもたちに対して、1991年から厚生労働省の事業の1つ「ふれあい心の友派遣事業」として始められている。実施個所は、児童相談所や教育相談センター、大学等研究機関や民間の支援機関など多岐にわたる。

メンタルフレンドのあり方としては、本人より年上の者が定期的に家庭訪問を行い、本人の好きな活動を

一緒に行なったり、必要に応じて勉強をみることで寄り添いながら、少しずつ「自主性、社会性の伸長を援助する」とされている。先行研究においては、「内向性・未熟さの改善」「社会化の促進」「外部の人間関係を求めるなど行動面の変化」「学力向上」なども効果としてあげられている（丹治ら、1997；東、2001；伊藤、2002；篠原、2004）。

2) メンタルフレンドの持つ様々な役割

メンタルフレンドの役割は様々なものがあるが、金井（1997）が次の4つにまとめている。1）「子どもを支える役割」、2）「子どもの興味や関心を広げていく役割」、3）「子どもの生き方のモデルとなる役割」、4）「子どもと社会との接点としての役割」をあげている。このうち1）「子どもを支える役割」と関連して、伊藤（2002）は、子どもの感情を受け止める「カウンセラー的役割」をあげており、その他に「友達の役割」、「教師的役割」をあげている。また3）「子どもの生き方のモデルとなる役割」と関連して、緒方ら（1994）はメンタルフレンドを親しみやすい「同一化対象」となりえるとしている。

こうした様々な役割は、年齢がCIと近いことによる「友達感覚（伊藤、2002）」の関係で通常行われるが、篠原（2004）の示した、家庭教師としての関わりに近い報告の場合、治療的枠組みがより厳密になる傾向がある。

3) メンタルフレンド活動の多様化

メンタルフレンドに関しては、これまで何度か実態調査が行われてきたが、そのうち市根井・中野

(1999)の児童相談所を対象とした調査によると、対象児童に反社会的行動のある者(12%)や、被虐待児(8%)などが含まれていた。事業開始から数年で、既に様々な対応が現場では求められていたことがわかる。

これに関連して、大原(2009)が非行少年に対してメンタルフレンド的な訪問援助の実践を報告しており、通常のメンタルフレンドと異なる点として「何があっても見捨てない姿勢」や「節度ある押し付けがましさをあげている。また、発達障害を有している児童に対しての活動(金成ら、2004;大原ら、2008;栗田2009)も報告されており、その効果として「学力向上」だけでなく「他者との情動の共有」「感情の安定」などをあげている。他にも、児童養護施設の入所児童に対しての活動(飯田、2005;土田、2006)では、「情緒的問題の表出」や「身近なモデル像」といった効果も報告されている。

このようにメンタルフレンド活動は、核となる共通点を持ちながらも、対象児童が抱える問題に合わせて、様々なあり方を変化させていることがうかがえる。

4)メンタルフレンドの活動内容とその効果

メンタルフレンドは、児童にとって様々な役割を持ちながら関わっているが、活動の内容はいかなるものなのか。厚生労働省は、「子どもの良き理解者として子どもに接し」、「総合的な援助を行うことにより、子どもの自主性及び社会性の伸長、登校意欲の回復並びに家庭における養育機能の強化を図り、もってこれら子どもの福祉の向上に資することを目的とする」としている(平成18年厚生労働省資料)。これまでにいくつかの事例報告がされているが、メンタルフレンドは主に大学生(または大学院生)が中心となって行っている活動であり、事例が蓄積されないままに彼らが卒業して支援を離れてしまうのが難点である。具体的にどのような活動が行われており、子どもたちがどのような行動面の変化をみせるのかを知ることは、一層効果的な支援につながるのではないだろうか。栗田(2005)は、メンタルフレンドの効果を検討するため、対象者の行動の変化について指標を作成した。今回は、幅広くデータを収集して項目の精査を行いたい。

3. 本稿の目的

以上のことから本稿では、研究Ⅰとして、児童相談所を対象に全国調査を行い、事業実施から20年が経過したメンタルフレンド事業の現状を改めて探り、活動内容や子どもたちの変化を収集し、その傾向を探りたい。次に研究Ⅱとして、不登校の生徒に対してメンタルフレンド活動を行った、比較的「典型的」と思わ

れる事例をまとめ、研究Ⅰと合わせて、メンタルフレンドの活動内容とその効果について考察を試みることにする。

4. 研究Ⅰ

1) 研究の目的

メンタルフレンド事業の現状把握と、具体的な活動内容、子どもたちの具体的な行動面の変化について、実態調査を行う。

2) 方法

①調査対象

2010年12月時点で厚生労働省がホームページで公開していた、全国の218の児童相談所のメンタルフレンド事業(メンタルフレンドに類する事業)担当者

②調査方法

返信用封筒を同封した調査票を郵送

③調査期間

2010年12月中旬～2011年1月中旬

④調査項目

メンタルフレンド実施の有無、実施していない場合は、今後実施するかどうかを「ある」「なし」で聞いた。次に、メンタルフレンドが派遣されている児童の抱える問題を、先行研究(市根井・中野1999)の項目を元に作成し、「不登校」「ひきこもり」「学力不振」「いじめ」「反社会的行動」「虐待」「その他」に、今回「発達障害」を付け加えて多い順に3位まで記入させた。次に派遣回数を、「1～5回」「5～10回」「10～20回」「20～30回」「30回以上」のうちから、多い順に3位まで記入させた。次に児童との関係を、「会っていない」「毎回ではないが一緒に活動している」「一緒に活動して安定している」「復学・進級など次のステップへ」「活動中止」のうちから、多い順に3位まで記入させた。最後に、「どのような活動を行っているか」「児童の変化」を自由記述で回答させた。

3) 結果と考察

①メンタルフレンド事業実施の有無

郵送した218か所中、回答を得られたのは115か所で回収率は52.8%であった(宛先不明が3か所、回答拒否2か所)。そのうち、事業を実施していると回答したのは39か所で、先行研究の91か所と比較すると大幅に減少していた。この理由について、欄外に事情を記載してあった回答が散見されたため、それらをあげると、「利用者がいないため事実上なし」「児相以外の相談窓口が増えた」「事業の統廃合により終了した」「児童の抱える問題が重く、メンタルフレンドでは対応できない事例が増えたため」などがあがった。

一方、希望者がいれば今後実施したいとする事業所も見られた。

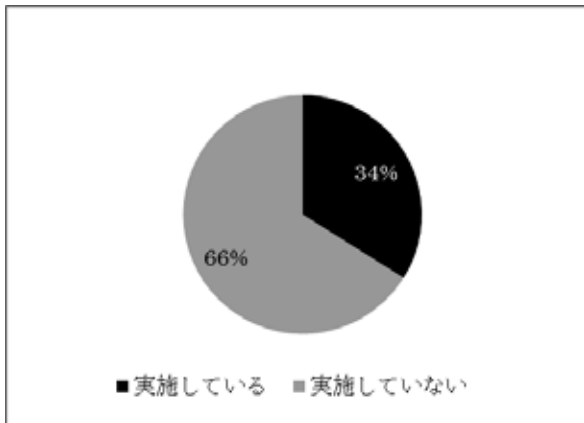


Figure1. メンタルフレンド事業実施の有無

②派遣先の児童が抱える問題

児童の抱える問題を、多い順に3位まで選ばせたのが Figure.2である。

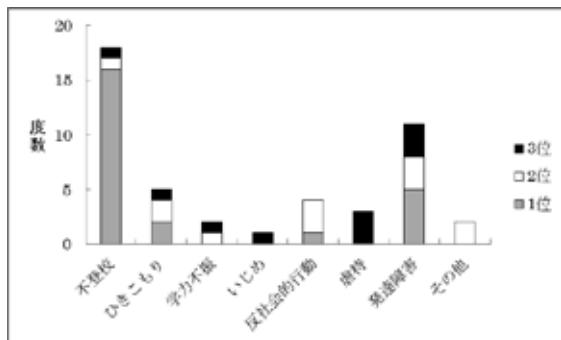


Figure2. 児童が抱える問題

不登校が一番多いが、発達障害が次に多いということが分かった。また、虐待の事例もあるようで、かつての「典型的な」メンタルフレンドのあり方と質的に異なる側面があると感じた。

③派遣回数

メンタルフレンドの派遣回数を、多い順に3位まで選ばせたのが Figure.3である。

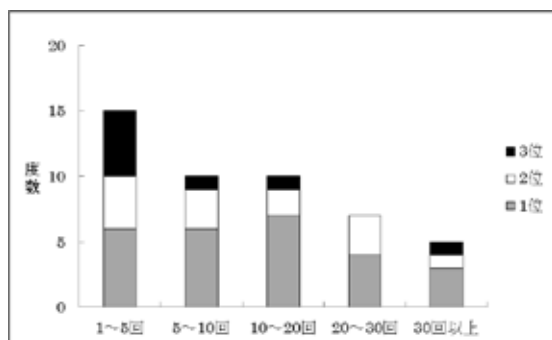


Figure3. メンタルフレンド派遣回数

1~5回と派遣回数が少ないケースが最も多かったが、これは(4)児童との関係にあるように「会えていない」というケースも含まれると考えられる。一方、10回以上になると、数か月単位で関係が築かれていることをあらわし、中には30回以上と、恐らく年単位で派遣されているケースもみられ、安定した関係性が築かれていることが推察されるのと同時に、メンタルフレンドの心理的な負担について考えさせられた。

④児童との関係

メンタルフレンドと児童との関係を、多い順に3位まで選ばせたのが Figure.4である。一緒に活動して安定しているとする回答が多かった。これは(3)派遣回数が増えると関係も安定することが考えられる。一方、様々な理由から活動中止となるケースもあるようである。この理由として、「メンタルフレンドが大学などを卒業するにあたり、他のメンタルフレンドと交代したことで会わなくなってしまった」という回答があげられた。メンタルフレンドが唯一の社会との接点であった場合、その機能が失われることは、子どもにとって痛手であろう。また、「児童が施設入所になり継続困難となった」という深刻なケースや、「子どもが『合わない』と自分から断ってきた」というマッチングの問題について考えさせられるケースもあった。

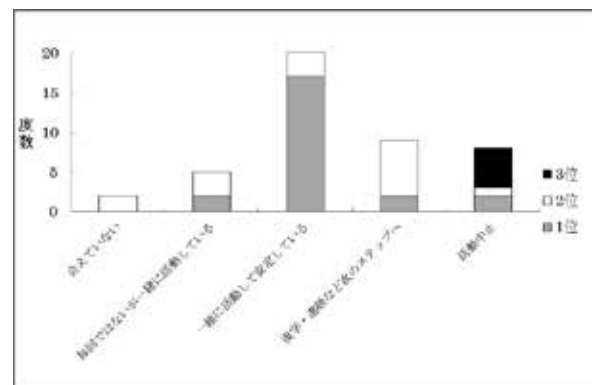


Figure4. 児童との関係

⑤どのような活動を行っているか

具体的にどのような活動を行っているかを自由記述で回答を求めた。以下、Table1に回答の例を示す。なお内容の分類は、金井(1997)と伊藤(2002)のメンタルフレンドの役割をもとに「友達の役割」「子どもを支える役割(カウンセラー的役割)」「子供の生き方のモデルとなる役割」「子どもの興味や関心を広げていく役割」「教師的役割」のカテゴリーを作成した。

Table1. 役割別の活動内容

友達の役割
子どもの好きな活動をする① (定型的・受身的な活動) ベイブレード、カードゲーム (遊戯王)、UNO やトランプ、ビーズ、テレビゲーム、一緒にお菓子を食べる、アニメをみる、テレビやDVD をみる
子どもの好きな活動をする② (自己表現を伴う活動) 工作をする、プラモデルを作る、DS を使って絵や言葉のやりとり、イラストを描きあう (日々のエピソードをイラストにする)、料理、雑誌のヘアスタイルを真似て結う
一緒に外出する プール、趣味のカードを買いに行く、運動をしに行く (バドミントンやテニス)、コンサート、不登校児を対象にした集まりに参加する
子どもを支える役割 (カウンセラー的役割)
おしゃべりをする、子どもの話を受容的に聞く、子どもの言葉を大事にする、声掛けを丁寧に行う
勉強を頑張った時にほめる
子どもの生き方のモデルとなる役割
メンタルフレンド自身の話を聞く
子どもの興味や関心を広げていく役割
趣味の話をする：音楽、好きな芸能人、動物
社会化を促す：日々のニュースを見るなど
教師的役割
学習指導
言葉だけでなく文字で示すなど個別の指導 (発達障害児に対して)
進路指導 受験のための情報や知識など情報提供、インターネットで高校の情報を一緒に探す、体験入学の話を書く、進路についての不安を話す
会えない時：手紙・メール・電話など

「メンタルフレンドとの関係性の中で、その時その時の状況に合わせた関わりが自然になされていることが大切だと思います」との回答があったように、自然な、そして豊かな活動が行われていることがわかる。

⑥ 児童の変化

具体的にどのような変化があるかを自由記述で回答を求めた。以下、Table2に回答の例を示す。「外部の人間関係を求める」「内向性の改善」「意欲の向上」「問題行動の減少」「進路の自己決定」などのカテゴリを作成した。

4) 研究Ⅰのまとめ

まず、メンタルフレンド事業の実態把握の目的で行った調査であったが、ここ10年の間に事業規模が縮小していることが分かった。一方、詳細なレポートを添付して下さった事業所や、メンタルフレンド本人に調査を実施して下さった事業所もあり、事業への取り組みは担当者によるところがあるのではないかと感じさせられた。

そうした中で、児童の抱える問題は、いくつかの先行研究で述べた通り「典型的な」不登校だけでなく、発達障害や虐待など複雑化していた。かつてのメンタルフレンドの方法論で対処しづらいケースに対し、現

場では様々な工夫しながら、手探りで活動していることが推察されたのと同時に、児童の変化に合わせて、柔軟で豊かな活動が行われていることが分かった。

どのような活動が行われているかは、まず先行研究をもとに「友達の役割」「カウンセラー的役割」などの役割のカテゴリを作成し、カテゴリごとに具体的な活動内容を分類していった。すると、受身でも楽しめるような活動から、表現を伴う活動、外出行動や本人を支える行動など、様々な活動が行われていることが分かった。

メンタルフレンド活動による子どもの変化については、栗田 (2005) の「精神的な健康」指標である、「元気があった」「声が大ききはきはきとしていた」「服装がきちんとしていた」などの項目が今回は見られなかったが、「メンタルフレンドを心待ちにするようになった」「笑顔が増えた」は共通であった。そこで、「外部の人間関係を求める」カテゴリを新たに作成し、類似の項目と合わせて分類した。また「問題行動の減少」という分類も新たに作成したカテゴリであるが、何らかの背景を持った児童への対応から出てきたであろう項目をまとめたものである。パニックや行動の切り替えといった項目からは自閉症スペクトラムの特徴が伺え、確認や対人緊張と言った項目からは不安障害の特徴が伺える。どのような関わりをして、こ

Table2. どのような変化があったか

外部の人間関係を求める
玄関まで迎えにきた
メンタルフレンドを心待ちにするようになった
共感でき、笑顔が増えた
友人関係の悩みを話すようになった
やりとりを純粋に楽しむようになった
内向性の改善
生き生きと話すようになった、積極的に話をするようになった
意思表示が出来るようになった
話せなかったことが話せるようになった
意欲の向上
外出できるようになった
意欲が伸びた
問題行動の減少
パニックや確認の回数が減った
対人緊張がやわらいだ
素早く行動が切り替えられるようになった
行動面の荒れが少なくなった
集中が持続するようになった
進路の自己決定
進路について考えるようになった
適応指導教室に通うようになった、高校に進学した

のような問題行動が減少したのか、また今回作成したカテゴリーや項目は、今後更なる追加や省察が必要である。

行動面の変化については、メンタルフレンド自身を対象にして調査研究を行い、更なる指標を集めて、分類、省察していくことを今後の課題としたい。

5. 研究Ⅱ

1) 研究の目的

不登校の生徒にメンタルフレンド活動を行った事例を示し、その活動と効果について検討する。

2) 事例

①対象

26歳の男性A（訪問開始時は19歳）

②家族構成

サラリーマンの父、専業主婦の母、A、妹（2歳年下）の4人、及び飼い犬。

③訪問に至るまでの経過

Aは中学まではトップクラスの成績をおさめ、部活動でも部長を務めるなどのいわゆる優等生タイプの生徒であった。家庭内でも「うちの王子様（母親談）」扱いだったという。しかし有名進学高校に進学後、勉強についていけなくなると同時に、部活動でのトラブルが重なりだんだんと登校出来なくなった。やがて大

学受験を迎えるのに伴い、まったく登校できない時期が続き、高校はそのまま退学してひきこもった。心配した母親が、「自宅に訪問してくれる人に来て欲しい」と考え、Aが19歳時に訪問を依頼した。

④援助機関

「学校心理士」資格のある筆者が2005年4月に立ち上げたメンタルフレンドによる訪問支援団体であった。公的機関の援助が行き届かない傾向にある、18歳以上の学齢期を超えたひきこもり青年も対象としている。本事例では、筆者がメンタルフレンドの人選・目標の設定・母親との定期面談、スーパーバイズなどを行った。

⑤援助の導入とあり方

Aは不登校が始まってから3年の歳月が経過しており、家庭内で腫物に触るような状態であった。Aとはなかなか会うことができなかったが、無理に働きかけると、家族とも断絶して部屋に閉じこもってしまうのではないかと危惧された。そこで、母親やその他の家族と話す訪問が続き、同時に家族はメンタルフレンドについて「〇〇さんは～が好きなんだって。面白そうな人だよ」などとAの興味をひくように紹介するに留めた。基本的な関わりとしては、Aが部屋から出てくるまで待つこと、Aが部屋に帰ってしまったら引き止めないことなど、Aの意思を尊重して無理強いしないこととした。

⑥援助者（メンタルフレンド）の役割と支援の目標

メンタルフレンドBは、Aより1つ年齢が上の大学生で、Bは文武両道で課外活動に熱心に取り組む一面がありながら、細かいことにはこだわらないおおらかな性格であった。Aが几帳面で硬い考えをする傾向にあったため、Bのおおらかさを取り入れられると良いと考えた。また、BはAの前にもメンタルフレンド経験があったため、適任と考え支援を依頼した。支援の目標としては、まず、「受身で楽しめる活動」をしながら、家族以外の第三者と定期的に会えるようになることを目標とした。そして「友達の役割」の活動を重視しながら、関係が構築出来てからは、段階的に外出するなど「意欲の向上」も目標とした。また、Bの大学生活の話しを色々聞くことで、Aが「大学生活って楽しそうだな」と思えるような、「子どもの生き方のモデルとなる役割」をしていくことも考えられた。最終的な目標は「進路の決定」であったため、Aを支え励ます「カウンセラー的役割」に移行していくこととした。

⑦訪問のペース

1～2週間に1度、1回2時間程度。

⑧倫理への配慮

本研究をまとめるにあたり、個人を特定出来るような名称や言は避けることに配慮したと共に、本人より研究の趣旨を理解し同意頂いた。

2) 支援の経過

Aの行動の変化に合わせて「メンタルフレンドに会えるようになるまで」「メンタルフレンドとの活動の深まり」「再チャレンジ」の全3期としてまとめた。その際、研究Iのメンタルフレンドの活動内容（Table1）と、どのような変化があったか（Table2）にあるカテゴリーを参照して記述することとした。

①第1期：メンタルフレンドと会えるようになるまで

メンタルフレンドBが訪問を開始したが、Aと顔をあわせることが出来なかったため、この時期は不信感を与えないようにすることを目標とし、家族と談笑して過ごすことで「無理に部屋に入ったり、声かけをするようなことはしない」というメッセージを伝えた。家族はとても協力的で、Aが好きなテレビ番組のDVDと一緒に観て共通の話題作りに努めていたため、Bも一緒に居間で視聴することとした。そうすることで、Aに楽しい雰囲気が伝わらないか考えたためであった。

半年後、Aが居間に姿を現した。Aは話しかけても顔をしかめながら相づちを打つ程度で、堅苦しい雰囲気を見せていた。そのため、家族を交えての訪問を続け、Bと家族が話の中心となり、時々Aに話しかけて反応をみるといった会話を試みた。訪問中は、皆でDVDの視聴をして、Aにとって受け身で楽しめる活動（Table1「友達の役割」「子どもの好きな活動をする」）を続けたところ、徐々に笑顔が見えるようになっていった（Table2「外部の人間関係を求める」）。この時期は楽しい、安心できる時間を長くすることを目標とした。

家族はAに飼い犬の世話を任せており、「Aの言うことは聞くのよね」とAに役目を持たせていた。Bも犬と一緒に遊ぶことで、緊張を和らげるツールとして存在していた。

②第2期：メンタルフレンドとの活動の深まり

やがて、AもBの存在に慣れ、Bが授業やゼミ、サークル活動、バイト、旅行など大学生活の話をするようになった。Bは文武両道で、当初はAにとって尊敬できる人物とうつつたようであった。しかしBは同時におおらかな性格でもあり、破天荒な体験談「酔って道端で寝た」などをしたところ、Aは「自分にはとても真似できない」と目を丸くして聞いていた。Aは堅い性格であったため、筆者は、「こんなことをしても平気なんだ」と、Bのおおらかさを同一化対象として取り入れて欲しいと考えた（Table1「子どもの生き方のモデルとなる役割」）。また、大学生活に希望を持って、動機づけを高められればとも考えた。

やがて、Bが誘うと外出することが出来るようになった（Table1「一緒に外出する」）。はじめはA宅まで迎えに行き、家族の車で最寄りの駅まで送ってもらうようにしていたが、少しずつ、最寄り駅に集合、2人の中間駅に集合、現地集合へとしていった。外出先は、有名なラーメン店めぐりなど、友達同士とするような活動とした。AとBはお互いにラーメンの味を得点化して比較したりと楽しんで活動することが出来た。やがて思い立って2人で1週間旅行に出かけた。Aは朝から晩まで分単位で計画を立ててきたのに対し、Bは朝なかなか起きず、乗る予定の電車にもう少しで乗れなかったといい、「Bさんはすごいと思った」と話した（Table2「意欲の向上」「外出できるようになった」）。

③第3期：再チャレンジ

Bとの活動が深まるにつれ、大学受験を再び志すこととなった。目標は難関国立大であり、Aのプレッシャーは計り知れないものがあった。再チャレンジ1

年目は秋口から塞ぎこむ日が続き、入学試験を申し込むことが出来なかった。家庭内では荒れた言動が見られるようになり、Bに会うことが出来ない日も出てきた。そのため、Bがドライブに連れ出したり、再び長期間の旅行に出かけたり気分転換しながら、大学受験のアドバイスをした（Table1「教師的役割」「進学指導」）。

再チャレンジ2年目に、Aは「誰も知らないところに行きたい」と、父方の祖父母の家に転居し予備校に通うこととした。大学を卒業したBが、メールや電話で様子を聞いて励まし続けた（Table1「子どもを支える役割」「カウンセラー的役割」）。1年間の予備校生活の後、最難関の国立大に合格したため、支援を終了とした。

④支援の振り返りと考察

Aは後に「一人ではどうにもならない状態だった。誰かにドアを開けて欲しかった。ずっと待っていた」と話した（Table2「外部の人間関係を求める」）。そして大学生活を送る中で、「自分の経験を生かしたい、自分も誰かの役に立ちたい」と自らも不登校生徒への訪問支援活動を行うようになった。不登校経験のあるAの活動は好評で、保護者から「Aさんの存在自体が励みになる」と言われていた。現在は、精神科医になるため医学部で学びを深めながら、筆者の活動に顔を出し続けてくれている（Table2「進路の自己決定」）。

本事例は、不登校からひきこもりになった後、メンタルフレンドの派遣要請があり、最終的に進路決定に至ったという経過をたどった、いわゆる「典型的な」事例と言える。研究Iと対応させることで、メンタルフレンドの具体的な活動内容とその効果について理解が深められると考えられる。

6. まとめと今後の展望

本稿では、メンタルフレンドの役割とその効果がどのように変化したか、具体的にどのような活動が行われ、どのような行動面の変化があるのかを、実態調査と事例をもとに考察した。メンタルフレンドは、大学生など「準専門家」が行うものでありながら、不登校・ひきこもりなど子どもの抱える問題に有効であることがこれまでも分かっていた。本稿では、この有効性に光を当てられたのではないと思われる。

今後は、メンタルフレンドだけでなく、フリースペースなども対象とし、子どもの行動面の変化や活動の内容について更なる指標を集めたい。そして、不登校・ひきこもりの支援をエビデンスに基づいたものとしていきたいと考えている。

<引用文献>

- 東知幸 2001 引きこもりがちな不登校生徒に対するメンタルフレンドによるアプローチ 心理臨床学研究, 19, 290-300
- 飯田良子 2005 保育学科学学生によるメンタルフレンド活動に関する一考察（第2報）：児童養護施設入所児童を対象として 香蘭女子短期大学研究紀要 48, 127-131
- 伊藤順一郎（編）2005 ひきこもりに対する地域精神保健活動研究会 地域保健におけるひきこもりへの対応ガイドライン じほう
- 伊藤美奈子 2002 メンタルフレンド活動による不登校児童の変化—不登校のタイプとメンタルフレンドの属性による比較—, カウンセリング研究, 35, 256-264
- ひきこもり等児童福祉対策事業の実施について 平成18年度厚生労働省子ども子育て支援課通知文 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/tuuchi-47.pdf>
- 金井雅子 1997 メンタルフレンドはどんな役割を果たしているか 児童心理, 51, 105-110
- 金成美恵・押尾直子・佐久間恵ほか 2004 学習困難を持つ子どもへのメンタルフレンド活動—算数・数学の学習支援を中心に 福島大学教育実践研究紀要（46）（89）, 89-97
- 厚生労働省報道資料 平成22年5月 ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン http://www.ncgmkohndai.go.jp/pdf/jidouseishin/22ncgm_hikikomori.pdf
- 栗田明子 2005 不登校・ひきこもりに対する訪問支援活動の有効性の検討 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊（13-2）, 109-119
- 栗田明子 2009 メンタルフレンドによる訪問支援プロセスと支援を阻害・促進する親の態度—親が捕らえるひきこもりの子どもの成長とは— 家庭教育研究所紀要30
- 近藤邦夫・成田百合子・友山和美 1981 或る登園拒否児の心理治療過程について：治療的家庭教師を通じての働きかけ 千葉大学教育学部研究紀要・第1部 30, 27-51
- 大原天青 2009 非行臨床における訪問援助活動の役割と課題—BBSのともだち活動の実践カウンセリング研究 42（4）, 312-321
- 大原榮子・永井靖人・佐治恒佑 2008 広汎性発達障害児へのメンタルフレンド活動：アスペルガー症候群と診断された男児Aの事例 日本教育心理学会総会発表論文集（50）, 431
- 内閣府報道資料 平成22年7月 若者の意識に関する

No. 2

<p>① 彙せていない 状態の子どもに対して 具体的な働きかけ・言葉かけのエビデンスを教えてください。</p>	}	}
<p>子どもの状態・行動の変化を具体的に教えてください。</p>	}	}
<p>② マンタリングと話をしたり一緒に活動を行うことが、毎回ではないができるようになった 状態の子ども に対して 具体的な働きかけ・言葉かけのエビデンスを教えてください。</p>	}	}
<p>子どもの状態・行動の変化を具体的に教えてください。</p>	}	}
<p>③ 一緒に活動するようになって安定している 状態の子どもに対して 具体的な働きかけ・言葉かけのエビデンスを教えてください。</p>	}	}
<p>子どもの状態・行動の変化を具体的に教えてください。</p>	}	}

No. 3

<p>④ 復学・通学・進学など、次のステップへうつる準備をしている 状態の子どもに対して 具体的な働きかけ・言葉かけのエビデンスを教えてください。</p>	}	}
<p>子どもの状態・行動の変化を具体的に教えてください。</p>	}	}
<p>⑤ 何らかの理由で活動が中断したり中止になった 状態の子どもに対して 活動が中断したり中止になった理由を、差し支えない範囲で教えてください。</p>	}	}
<p>⑥ その他 状態の子どもに対して 具体的な働きかけ・言葉かけのエビデンスを教えてください。</p>	}	}
<p>子どもの状態・行動の変化を具体的に教えてください。</p>	}	}
<p>以上で質問は終わります。ご協力いただき、誠にありがとうございました。</p>		